編 集 後 記

数ヶ月後の日本は，第2次世界大戦の終結から「戦後80年」を迎えます。1945年8月，広島と長崎に原子爆弾が投下され，凄まじい熱線と爆風によって都市は一面の焼け野原と化し，何万という無辜の民の命が一瞬で奪われました。生き残った人々も放射能の後遺症に苦しめられました。この悲惨な実態を次世代へ語り伝え，被爆者の立場から核兵器の廃絶を訴えてきた日本被団協（日本原水爆被害者団体協議会）が昨秋，ノーベル平和賞を受賞したことは誠に喜ばしく，日本国憲法が「平和主義」を堅持し，国民も平和を希求した賜物です。

しかし，世界の情勢を省みれば，ロシアとウクライナの戦争が3年を超えたことを始め，イスラエルとパレスチナの戦争といった他国間だけでなく，ミャンマーの軍事クーデターによる軍部と市民の内戦など，世界の至る所で争いが絶えません。地球温暖化で気候変動のリスクも高まり，マンハッタン計画で原子爆弾を開発した米国の科学者たちが1947年に核戦争の危険性を警告する目的で創設した「終末時計」が「人類滅亡」まで過去最短の残り89秒となりました。宇宙船地球号に乗っている地球人同士が殺し合っている暇はありません。

昨年死去された詩人の谷川俊太郎さんが「国境なき医師団に寄せる」で「傷ついて赤い血を流し　痛みに悲鳴を上げるのは　敵も味方もないカラダ　ココロは国家に属していてもカラダは自然に属している　肌の色が違っても　母の言葉が違っても　信ずる神が違っても　カラダは同じ　ホモ・サピエンス　いのちがけで　いのちを救う　カラダに宿る　生まれながらの　見えない愛　国境は傷　大地を切り裂く傷　ヒトを手当てし　世界を手当てし　明日を望む人々がいる」（2019年12月アーツ千代田3331「エンドレスジャーニー展」）と書き下ろした詩は，進化した現生人類が共通に持つ深奥質感へ普遍的に響きます。

人間科学は、「人間とは何か」「人類はどこから来てどこへ向かうのか」を人文・社会・自然の各領域から問い続け，恒久世界平和とSDGsの実現に貢献する研究でありたいと願います。

今号は，こども学科5件，スポーツ学科3件，合計8件の投稿がありました。
どうぞご高覧ご批正くださいますよう，宜しくお願い申し上げます。

2025年3月吉日
編集委員長
馬場　治

《投稿された論文等に関する著作権は，基本的に人間科学部会に帰属します》
「金沢星稜大学学会 会則と規程等」については，下記のWEBサイトをご覧ください。
http://www.seiryo-u.ac.jp/u/education/gakkai/research02.html